

農耕からみた「高地文明」としての東ヒマラヤの特徴

安藤和雄

東南アジア研究所

東ヒマラヤは地理的にはブラマプトラ水系の東西に伸びるカンチェンジュンガからカカボラジまでのシッキム、ブータン、アルナーチャル・プラデーシュ、ミャンマーの範囲である。本稿では、東ヒマラヤの地域的特徴を湿潤モンスーン農業の焼畑と水田の存在、無床のモンパ犁、冬季森林放牧の農業から論じた。つぎに、具体的な調査事例としてモンパ社会を紹介した。そして、東ヒマラヤが「地域としての単位性」を特徴として有し、高地文明を構成する「文明単位」となりうることを示唆した。

キーワード：アルナーチャル・プラデーシュ、東ブータン、モンパ、ブロッパ、シャルチョッパ

1. ブラマプトラ水系がつくる東ヒマラヤ

バンコクを早朝に離陸したブータン航空（ドゥルック・エアー）は、バングラデシュ領内の大河ブラマプトラ川を横切る。インドの西ベンガル州の上空でカンチェンジュンガの雄姿を目前に、北北西から東へと針路を変え、ブータンのパロ空港へと向かう。進行方向左手の窓からは、天候に恵まれれば、エベレストやカンチェンジュンガを見ることができる。2013年9月20日もそんな一日だった。わくわくする気持ちを抑えて、ブータン航空の機体の中で、私は学生たちに、「あれがエベレスト」「こちらがカンチェンジュンガ」と指し示した（写真1）。このブータンでの調査には、アイセック京都大学委員会というサークルに属す学生グループの9名が同行した。アイセックは学生の海外インターンシップを支援している全国的な学生団体で、その京都大学支部である。私は海外インターンの選抜のための口頭試験や、彼らの勉強会の講師などの依頼を受け、ここ数年アイセックと関わってきた。

アイセックのメンバーが、2013年9月の夏の研修旅行の一つに東ヒマラヤの地であるブータンを選んだ。そこで、彼らが当たり前のこととして享受している西洋近代化がつくった日本の都市文明とは異なった、農村にしっかりと根を下ろす「高地文明」が展開している東ブータンを見学することを彼らに提案した。高地文明は、その中核に「高所」をそして「山」の世界をもっている。エベレスト、K2に次ぐ世界第3位の8,586mの標高をもつカンチェンジュンガの神々しい姿の出迎えを受

けることで、今から向かうブータンが、低地の“俗”とは異なる高所の“聖”の世界であることを印象づけられるのである。ブータンを初めて訪れる彼らには、是非ともこの通過儀礼をしてもらいたかった。雨季であったが、幸い、カンチェンジュンガはその雄姿を見せてくれた。私は、この高峰から東へミャンマーのカカボラジ（5,881m）辺りまでを東ヒマラヤと呼んでいる。

私のいう東ヒマラヤの地域は、ジャック・デュピュイの『ヒマラヤ』に依拠している。同書は定義をしっかりと説明していないが、ヒマラヤの東端をミャンマーの山々とし、西端をイラン周辺の山々としている（同書：5）。そして、ヒマラヤを西部、中部、東部に区分し（同書：33-35）、東部ヒマラヤをカンチェンジュンガからツアンボ（ブラマプトラ川）の屈曲部までとし、シッキム、ブータン、アルナーチャル・プラデーシュなど750キロメートルに広がっている地域であるとしている（同書：132）。

私が考える、東ヒマラヤの地域的広がり の定義の根拠は、山とともに、土地の起伏をつくり、人の暮らしに大きな影響を与えてきた川と雨によっている。東ヒマラヤはユーラシア・プレートとインド・プレートの衝突による隆起地形であるが、東ヒマラヤは、ヒマラヤの北面を源頭とするブラマプトラ川とその支流がつくった地形でもある。この定義を用いれば、東ヒマラヤはティスタ川からエーヤワディー川まででとなる。したがって、エーヤワディー川の源であるカカボラジを東ヒマラヤの東端と位置づけることは妥当である。この

地域区分によって、東ヒマラヤの固有の特徴がより明確になる（図1）。

デュビュイ（同上書：27-28）の植生分布を加味した気候区分によれば、ヒマラヤの気候を考える上で重要な点は、まず、緯度的にヒマラヤ全体が熱帯世界に位置している点であり、各地域の気候は、熱帯気候を緩和した変化形であることである。そして、ヒマラヤの東部、中部、西部は、降水システムによって明瞭に特徴づけられる。東部はモンスーンの熱帯的システムであり、西部は地中海型のように冬と春の雨が支配的であるシステムである。純粋なモンスーンの支配する東部ヒマラヤ（東部ネパールを含む）、モンスーンではあるがかなり乾燥していて冬に若干の雨に恵まれた中部ヒマラヤ（中央ネパールからマクマオンまで）、冬と春の雨がモンスーンの雨よりも重要な意味をもつのが西部ヒマラヤである。東ヒマラヤは、年降水量が1600 mm 前後～5000 mm 以上の、ブラマプトラ水系で結ばれたベンガル、ミャンマー、チベットの古い文化圏に隣接する湿潤モンスーンがつくる世界なのである。そして、古代に

は西南シルクロードによって陸路でも結ばれた地域であった。本稿では、東ヒマラヤを一括りの地域単位として、その固有の特徴を、農耕・牧畜のシステムからまとめる。そして、そこから高地文明を考えることの必要性を述べたい。

2. 東ヒマラヤの湿潤モンスーン農耕の文化的特徴

私たちアルナーチャル研究グループが調査対象としてきた東ヒマラヤは、他のグループが対象としたラダークや青海省の高所地域とは大きく異なっている。それは、隣接する大文化圏のあり方やその影響によっている。誤解を恐れずに大雑把に言えば、西ヒマラヤは中東のイスラム文化圏、中央がインドのヒンズー文化圏、東はチベット文化圏と東南アジアなどにも色濃く残るアニミズム文化圏—ベンガルとアッサム、ミャンマー—の影響を濃く受けてきた。青海省は中国の漢民族文化圏の影響を受けてきた。

東ヒマラヤは、歴史的に、近年にいたるまで、大文化圏から比較的遠い存在であった。チベット

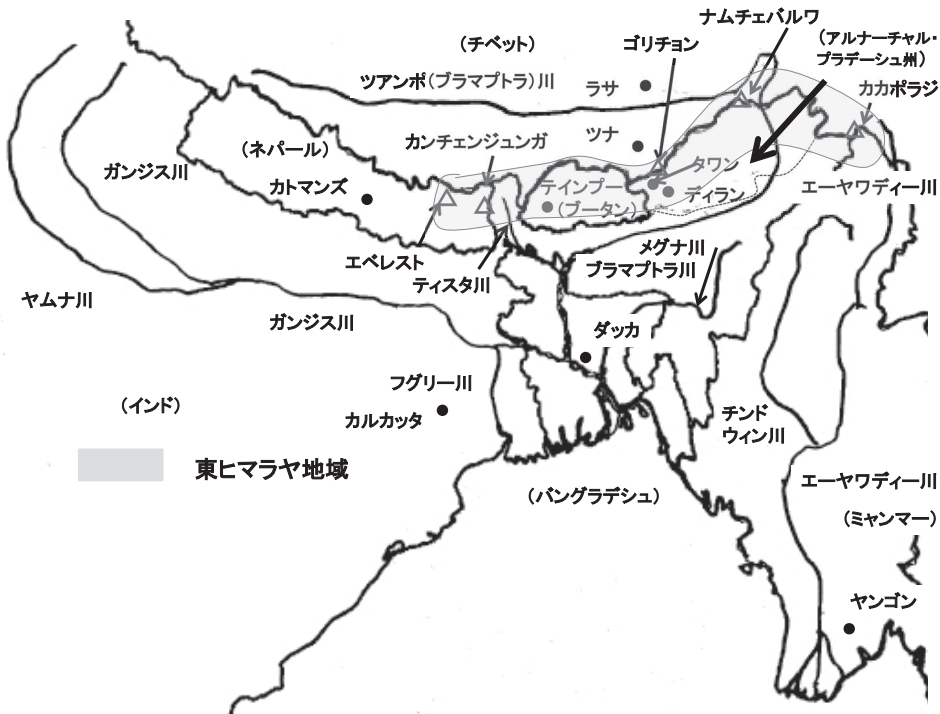


図1 東ヒマラヤとその周辺

文化圏の影響は受けてきたが、東ヒマラヤではチベット仏教に山岳、河川、石、巨木などへのアニミズム的信仰が色濃く残っていることや、農耕においても、ラダークや青海省が灌漑・畑作農業を基幹としているのとは大きく異なっている。特に、私たちの調査地である東ブータンとアルナーチャル・プラデーシュでは、その違いは明瞭である。そこでは、伝統的に天水・焼畑農業を基幹とし、水田作が標高 2000 m の高地まで展開している。農耕文化から東ヒマラヤを見ると、そこには、湿润モンスーン気候のベンガル、アッサム、ミャンマーにつながる焼畑や水田イネ作が、伝統的な農耕として展開されているのである。

私たちは、ラダークや青海省との比較を意識し、アルナーチャル・プラデーシュでは高所住民として知られているモンパ Monpa の人々が暮らすウエスト・カメン West Kameng 県のディラン Dirang 郡を主な調査地として設定し、水田農業の比較のためにアパタニ Apatani の人々や、焼畑農業の比較のために、ニシ Nishi やガロン Galon の人々の生業調査も行った。ウエスト・カメン県は、西をブータンと北をチベットに隣接する地域である。また、モンパと類似する言語や生活習慣をもつ東ブータンのシャルチョッパ Sharchopa の人々とブロッパ Brokpa の人々が住む、タシガン県のカリン行政村やメラックとサクテンの行政村でも調査を行ってきた。さらに、従来私たちが行ってきたバングラデシュやアッサム、ミャンマー、雲南、チベット、青海省の調査結果とも比較検討してきた。

2.1 モンパ、シャルチョッパ、ブロッパの言語

モンパ、シャルチョッパ、ブロッパの人々は、いつ頃から東ブータンとアルナーチャル・プラデーシュに居住するようになったのだろうか。アルナーチャル・プラデーシュの古代人に関するもっとも古い記録は、紀元前 5 世紀から 4 世紀に成立したと考えられているマハーバーラタである。そこには、チナ（中国人）とは別な人々としてキラータ Kirata という名前で記録がある（Chowdhury 1996:16）。すでにこの時代にアルナーチャル・プラデーシュ地域には、インドアリア系の人々たちから、中国人とは異なるキラータと一括りにされる人々が居住していたと推定されている。キラータがモンパ、シャルチョッパ、ブロッ

パの直接の祖先につながるかどうかは定かではないが、以下に述べるように、この三つの民族の使用言語は、いずれもチベット系言語に分類されているが、日常的なレベルでは興味ある類縁関係が認められることと、ブロッパのみが、移住に関するしっかりとした伝承をもっている（Chand 2004:35-38 などを参照）。

牧畜に従事する人びとはブロッパと呼ばれる。アルナーチャル・プラデーシュでもブロッパはいるが、モンパのサブ・グループとして扱われている（以降、モンパとブロッパを区別して用いる）。彼らは、ヤクや、ヤクとウシとの交雑種のゾー Zo（牡）・ゾモ Zomo（牝）を、標高 4000 m の夏の草地から標高 2500 ～ 2000 m の森林地帯の間で放牧し搾乳を行う「移牧」を生業としている。彼らは 7 世紀前後にチベットのツナ Tsona から伝説の女性アマジョモとともにブータンやアルナーチャル・プラデーシュ州に南下してきたことが、ブータンのブロッパの間に伝わっている。地図では、ツナはタワン Tawan から北にまっすぐに国境を超えたところの最初の大きな町である（図 1）。

ディランのモンパの友人の話では、タワンのモンパの言葉は日常語として理解できないほど異なっているという。このことはブロッパについても同じであるという。つまり、ブロッパとモンパやシャルチョッパでは日常語が異なっている。ディラン郡とキャラクタナ Kalaktang 郡のモンパはシャルチョッパの言語とよく類似し、ブロッパの言語はチベットに類似するとモンパの中では常識化されている。アルナーチャル・プラデーシュ州のモンパは、言語的に、西のタワン県のモンパと、東のウエスト・カメン県のディラン郡・キャラクタナ郡に住むモンパに分かれている（図 2）。

Chowdhury (1996:39) は、Kennedy (1914) を引用して、当時のディラン周辺の記録を紹介している。そこに、タワンとディランの間点である標高 4000 m のセラ Sela 峠の東側（ディラン、キャラクタナ）のモンパは Sherchokpa（東ブータンのシャルチョッパの英語表記は、Sherchopa と記されることもあり、耳に聞こえる音ではほとんど区別ない）と呼ばれていたことが記されている。ディラン・キャラクタナの人々に対するシャルチョッパという呼び名は、東ブータンのシャルチョッパに通じ、日常言語の類似性から、東ブータンのシャ

ルチョッパとディラン・キャラクタン・モンパは言語的に同じルーツをもつ人々であるらしいと推察できる。

宗教的には三グループともにチベット仏教であるが、東ブータンのシャルチョッパのみがニンマ派で、他はゲルク派でチベットのラサをもととは総本山としていた。また服装は、シャルチョッパのみが異なる（写真2）。モンパやプロッパは同じである（写真3）。メラックで村人から聞いた伝説によれば、プロッパはチベットから追われて南下した時に、追っ手をまくために、タワンに入った時に、タワンと同じ服装にしたのだという。

つまり現在でこそモンパと呼び習わせているディラン、キャラクタン・モンパと東ブータンのシャルチョッパはチベット仏教の宗派を異なにしているが、日常言語の類似性から、チベット仏教を受け入れる以前の古代には民族的には同一であった可能性がかなり高いということになる。

2.2 東ヒマラヤの農耕の特質

1945年のディランでの農業の記録（Mills 1946）では、ディランのモンパは、自らを Grangmaranpa と呼んでいたらしい。そして、1945年当時、山岳地域の斜面では焼畑と常畑が、棚田では灌漑により水田が行われていた。当時すでに、焼畑は常畑化が進みつつあったという。

現在のディランの老人やたちの話からわかったことは、彼らが、今でこそ常畑と水田耕作が主であるが、以前は、焼畑と水田が主であったという。1945年当時、作物はイネ、コムギ、オオムギ、トウモロコシ、ソバ、シコクビエなどで、シコクビエは主に焼畑で栽培されていたようだ。ディランの老人によれば、焼畑でのイネ作が行われていた。インド政府がコメの配給制を始めて以来、焼畑でのイネ作は下火となったという。また、ウェスト・カメン県では、焼畑は政府によって近年禁じられたと聞いている。この点は東ブータンのシャルチョッパも同じ傾向であり、彼らは焼畑の民としても知られているが、現在は、表向きは焼畑は禁止である。

キャラクタン・モンパに関する1999年に出版されたモノグラフによればキャラクタンでは犁耕による常畑とともに焼畑が一般的であることが報告されている（Dutta: 34-35）。また、ウェスト・

カメン県のモンパのサブ・グループであるシェルドックパン（Sherdukpen）の人達も焼畑と常畑をつくっていたと1960年に初版が出版されたシェルドックパンに関するモノグラフに記録されている（Sharma: 28-37）。

焼畑がモンパやシャルチョッパの人たちに一般的だったとすると、それは、大変重要な示唆を含んでいることになる。仮に、根拠なしに一般的に語られているように、モンパやシャルチョッパの人たちがチベットから南下してきたとしよう。しかし、チベットの現状では焼畑の痕跡もなく、彼の地の半乾燥の気候条件下で古に焼畑が主に行われていたとは考えにくく、やはり灌漑常畑が気候条件には適していると考えられる。このことは青海省においても言えることである。

さらに興味のあることに、1945年の記録には、木製の犁先をもった犁を一人が操り、一人が鍊り木とくびきを操る、と記されている。この方法は現在でも行われている。そして、牽引しているウシは、ミタンとウシとの交配種の牝であった。その交配種の名称は記されていないが、これはジャチャ（またはジャツァ）のことであろうと推定できる。現在も一般的に犁の牽引用に使われている。東ブータンでも同様である。1945年の記録でも、アルナーチャル・ブラデーシュのミジ Miji の人が牝のミタンをダフラ Dafra（現在のニシ）の人をから購入して、ブータンの一般ウシ2〜3頭と若い牝のミタン一頭と国境近くで交換していたという（図2）。

一方、ヤクはディランの北の高所でのみ飼われていたという。ゾー、ゾモも生産されて飼育されていたようだ。しかし、ゾーは去勢されて、肉とされるか運搬用の役ウシとして使用されていたようである。ゾー、ゾモを生産するために、牝のヤクと交配させるために牝の高地ウシであるグラン Glan が飼育されていたことが記録されている。これも現在、ディランのプロッパたちが行っている方法と変わるところがない。ただし、ブータンのメラックやサクテンでは、現在は、同様の方法に加え、ゾー、ゾモを生産するのに牝のヤクを低地順化させて、一般の牝ウシと交配させることもしている。また、牝のミタンと牝のウシから生まれた牝の交配種はジャチュミン（またはジャツァム）と呼ばれ、ジャチュミンはゾモや牝のウシよりも

大量の乳を出すので、近年では、ブロッパの人たちが数頭のジャチュミンを連れていくところを見かける。ブロッパは、本来はヤクとゾモを飼っていたが、1950年代末以降のチベットとインドの国境紛争の影響により高地ウシであるグランの供給が困難になったことや、近代化の影響により現金の需要が増え、より多くの乳を得るためなどの目的で、ブロッパの人たちがジャチャムも飼うようになったことが、指摘されている（稲村ほか2012）。

以上の他に、東ブータンのシャルチョッパとディランやキャラクタン、タワンのモンパと農耕で特徴は、落葉オークの類や時によってはマツの落ち葉の利用の仕方に見出せる。シャルチョッパは落ち葉を耕地にマルチングせず、必ず、厩肥小屋でウシに踏ませてから厩肥として畑に施すが、モンパはトウモロコシを播いた畑に、落ち葉が敷きつめられ、厩肥はつくらない。落ち葉は、トウモロコシのみに施され、シコクビエ、イネなどの畑作には施されてない。この違いから、シャルチョッパとモンパの地理的分布が固定して農耕が確立した後に、この技術が導入されたのではないかと思える。

2.3 東ヒマラヤの犁

写真4はモンパが使っている犁で、写真5はシャルチョッパが現在よく使っている犁である。モンパは、水田用と畑用で犁先の大きながことなり、水田用は畑にくらべて大きい。そして、この犁のもっとも大きな特徴は犁床がまったくないことである。一般には無床犁と呼ばれ、きわめて安定性にかける（図3）。犁を牽引するジャチャが扱いにくいということもあるだろうが、無床犁で犁を制御する人は、犁の扱いに集中しなければならないこともあって、2人で犁引きを行うのだろう。犁床があれば安定し、片手をウシの制御に使うことも可能となる。

写真5のシャルチョッパの犁は、古老から聞いた話では、西の方から入ってきたもので、昔は写真4のモンパの犁がよく使われていたという。モンパの犁の利点は、斜面でも使いやすいことである。このことから推察できるのは、シャルチョッパは、以前はモンパの犁を使っていたことである。

次に、モンパの犁の起源について、ディラン郡の水田耕作が盛んなシャンティ Santi 村の古老（元村長）に尋ねた。「最初に犁が入ったのは水田で、アッサムの犁だった。それが、やがて畑に入り、今の形に変わったのだ、と伝え聞いている」とい

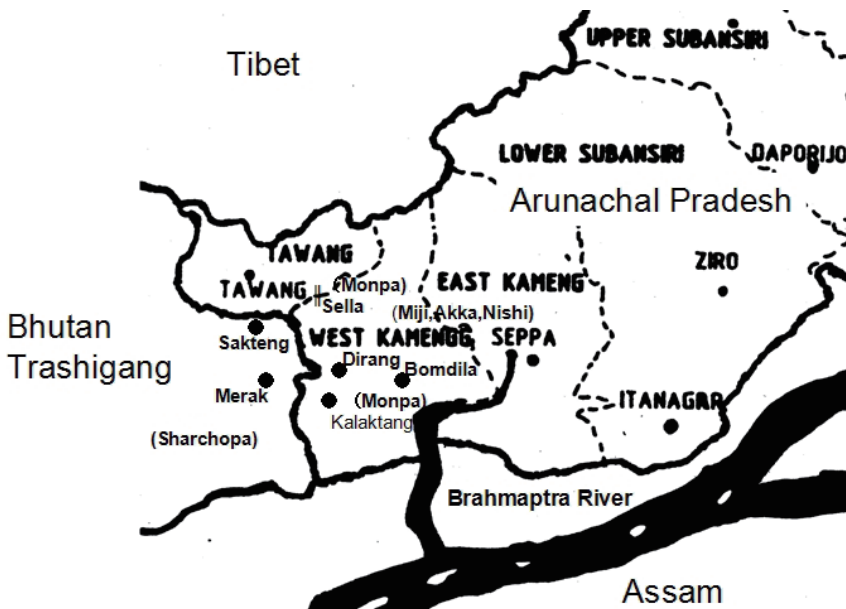


図2 調査地とその周辺の民族分布

う。年代は定かでないが、村の寺の歴史からして、300年前くらいではないか、ということだった。

モンパの犁は無床犁で、一見、どこにもない犁のように見えるが、犁先が差込式になっていることから、これが、ベンガル犁、つまり、アッサム犁のルーツをもつものであることが推察できる（写真6）（図4）。モンパがベンガル、アッサムと隣接していることから、犁の形状の影響を強く受けるのはもっともなことである。ただし、斜面での犁起し作業は、小型であるベンガル牛やアッサム牛では負担が大きいため、ジャチャが好まれるようになったのではないかと推察できる。

モンパの犁を、チベットや青海省のチベット人が使っている犁（写真7、8）と比較してみよう。この二つのチベットの犁は畑用である。モンパやシャルチョッパの犁と比較すれば分るように、鍊り木が犁柱についている位置や、犁先の形状やアタッチメントの仕方がまったく異なっている。チベットや青海省の犁先は、鍛鉄ではあるが、犁床に犁先をはめ込むようになっていのである。そして、立派な犁床をもっている。これは平坦な農耕地での耕起に向いている。雲南のシャングリラ県（中甸）の3000mの高所で見たチベット系の人たちは二頭のゾーに犁（中国の全部が鉄製の新しい反転犁）を引かせていた。一人がくびきを、一人が犁を操っていた。

犁の形状からすると、ヒマラヤを挟んで、北のチベット、青海省と、南の東ヒマラヤでは違う系列の技術が入ってきているようである（図4）。チベットには恐らく北インドかイランあたりから半乾燥地帯の犁農耕が、モンパにはベンガル系列の湿潤地帯の犁農耕がそれぞれ伝わって、モンパではそれがより在地的に発展し、他の地域では類をみない東ヒマラヤの湿潤と山地地形に適したモンパ犁を作ったのではないかと私は考えている。このモンパ犁に、私は東ヒマラヤとい地域の文化的、文明的アイデンティティを強く見出すのである。

2.4 東ヒマラヤの牧畜の特徴—森林飼葉牧畜

もう一つ私が東ヒマラヤの特徴として強く感じているのは、牧畜の形態の違いである。ヒマラヤで共通するのは移牧であるが、ブロッパの人たちは、冬季には、ゾー、ゾモとウシを、標高2500～2000mくらいの常緑の木々の多い森林（照葉

樹林）で放牧する。 yak とゾー・ゾモでは、飼いが微妙に異なっている。yak は夏季には標高4000mの草地にあげ、晩秋から冬にかけて3000mくらいの竹や笹の多い斜面に移動させる。勿論、冬季には草は枯れる。そういうところにyak を降ろす。そして、降ろされたyak からは搾乳しないのが原則である。つまり、ブロッパが飼うyak には閑乳期が明確に定められている。晩秋から冬季で食べる餌が極端に減少するからだろう。しかし、冬季に森林まで降ろされるゾモやウシには閑乳期は設定されていない。晩秋から、常緑の広葉樹、あるいは春先のカエデやヤナギの枝を山刀でたたき切り、下に落とすとゾー、ゾモ、牦牛、牦牛が集まってきて木の葉をうまそうに食べる。

yak も食べないことはないというが、好んで食べないので、枯れ草や笹や竹が冬季の重要な餌となり、まったく放牧されている。ブロッパは、週に一度あるいは二週間に一度くらい、塩をやり yak の冬季放牧地に出かけるだけである。この飼いは、アバタニやニシの人たちが行っているミタンの飼育のしかたとそっくりなのである。ミタンは一年中、森林に放たれる。祭りの肉用に現在では飼われていることが多い。

森林飼葉牧畜やミタン牧畜、冬季のyak の飼いは、青海省やラダーク、チベットでは見ることのできない、ユニークな東ヒマラヤ独特の飼い方と言えるだろう。東ブータンやウエスト・カメンの2000m前後の道路沿いの森林で、不自然に枝が切られて木々をよく見かけることができる。それは、この地で冬季に森林飼葉牧畜が行われてきた証拠なのである。

3. 高地ネットワーク社会:ディランのモンパ・モデル

本章は、すでに発表した『生老病死のエコロジー—チベット・ヒマラヤに生きる』の第3章「東ヒマラヤのあこがれ地、アルナーチャル・プラデーシュ—その魅力と現代文明への問いかけ」（安藤・石本・宇佐見・稲村：2011）に若干の加筆、修正した、アルナーチャル・プレデーシュ州ディラン郡のモンパ社会での調査による具体的な事例である。この事例によって、本稿の目的である東ヒマラヤの高地社会の特徴を提示し、高地文明の意義について言及する。



写真1 ブータン航空カンチエンジュンガ (2013.9. 20)



写真2 ブータンの民族衣装



写真3 メラックのブロックパの民族衣装



写真4 モンパの犁



写真5 シャルチョッパの犁



写真6 バングラデシュ (ベンガル) の犁



写真7 チベットのラサ付近の犁



写真8 青海省の犁

3.1 ウンパの農耕とブロッパの牧畜

モンパは、自分たちを生業の違いによりウンパとブロッパの二つに分類している。ウンパとは耕す人。Un は耕地の意味である。ブロッパはヤクの放牧をする人。Brok とは草地での遊牧を意味している。ただし、モンパといえばディランでは、大抵はウンパのことを意味する。モンパの起源がよくわかっていないというのは、ウンパについてであって、ディラン郡のブロッパについては、その起源が分かっている。ウンパのことをドゥンパと言ったりもする。Dun とは村のことで、ウンパは村をつくるが、ブロッパは伝統的には村をつくってこなかったからである。ブロッパについては、プータンのメラックとサクテンからの移住者と、チベットからの移住者を祖先とするグループに分けている。

ディラン郡のブロッパはまったく耕地を所有せず、前述したように主にヤク、ヤクとウシの交雑種であるゾモと高地に適応した乳牛を飼うことと生業としている。冬の11月から3月の間、標高3000 m 近辺の定住村で過ごすか、それよりも標高が低い2000～2500 m の常緑の木々が多い森の中で小屋に泊まり、ゾー、ゾモ、牛を飼葉飼育し、4月にはいり、気温の上昇とともに、ヤクを3500 m くらいの草地にあげる。6月に入ると、さらに4000 m の草地に移動し、7月にもっとも標高が高い4500 m の森林限界を抜けた草原でヤクを放牧し、8月には再び4000 m へ、9月、10月は3500 m、そして11月に3000 m に戻る。一方ゾモや牛は、ヤクよりもほぼ標高差で500 m 低い地点の草地と森に移動する、という移牧を行っている。ヤクやゾモから毎日乳を搾り、チーズ、バターを作る。また、非森林産物として森からシキミなどの実を集める。これらの生産物と羊毛などを、ウンパがつくる米、トウモロコシ、シコクビエ、ソバ、ジャガイモ、アラ Ara とよばれるシコクビエ、トウモロコシからつくった蒸留酒、塩などと物々交換する。主食はブペ Bupe とよばれるトウモロコシの粉をお湯で練ったものである。ブロッパの人々は、伝統的には服は自給である。野生のヤギ革のコートを羽織り、クパ Kupa とよばれるヤクの毛で編んだ服や、モガン Mogan とよばれる羊毛編んだ服を着用する。ヤクやゾモの飼育頭数は、一世帯あたり数十頭が一般的で、ヒツジを飼っているブ

ロッパもいる。ただし、その数は少ない。

ウンパは、定住の村をつくる。ディラン川とその支流であるサンティ川の小さな氾濫原や小さな谷筋を利用して水田が開かれている。水田をもつことを特徴とする村（これを水田村と呼ぼう）と、山の斜面の平らな地形を利用してトウモロコシやシコクビエ、ソバ、ダイズなどのマメ類、ジャガイモ、換金作物としてのキャベツなどを栽培している常畑に特徴がある村（これを常畑村と呼ぼう）に分けることができる。水田村は川に沿うように立地し、常畑村は、1500 m～2500 m にわたって斜面に点在している。

ウンパは、水田村では水田よりも一段高くなったところに屋敷地が数個から数十個あつまって小集落をつくる。畑が屋敷地の upper 段に広がる。畑村でも基本的なパターンは同じで、小集落の下方に大面積の畑が広がっている。畑村の場合、小集落の上方に大面積の畑が開かれていることは少ない。集落から一段高いところに、チベット仏教の寺であるゴンパがつくられている。畑のまわりには落葉のオークであるコナラ属の林がある。2月や9月にウンパの村を訪れるとコナラ属の林床にまったく落ち葉がなく、整備された林のようになっている。前述したように、コナラ属の落ち葉は冬12月頃にかき集められて、3月から作付はじまるトウモロコシの畑に施される。トウモロコシが播かれ、20 cm ほどの草丈となった時に、マルチングするように落ち葉で畑の全面を覆う。時には、トウモロコシと大豆が混播されていることもある。トウモロコシや大豆の収穫の前の8～9月に、落ち葉をひかくような道具をつかってかきまぜながらソバが播種される。ソバは11～12月に収穫される。トウモロコシとソバとのリレー作による二毛作が一般的である。水田の稲は6～7月に田植えされ11～12月に収穫される。冬の大麦や小麦もトウモロコシの畑で二毛作されるが栽培面積は少なく、大麦はとくに儀礼用のみに使われている。この他に、大面積で栽培されているのが、主に酒用に使われるシコクビエである。シコクビエは8月に直播され、11～12月に収穫される。畑では小面積だが陸稲も直播されている。シコクビエや陸稲の畑では落ち葉は施されない。二毛作の畑で落ち葉を施すのは、大変理にかなたやり方であるが、どうも、そればかりではなく、

トウモロコシは生育初期に栽植密度が、シコクビエや陸稲にくらべ圧倒的に小さいのでどうしても雑草の発生が多くなるので落ち葉のマルチで雑草の発生を防ぐ効果も合わせて狙っているようである。集落のまわり以外にも、数キロ山を登って、出作り小屋をたてて大面積の畑を栽培する。ただし、この場合もかならず周囲には落葉性のコナラ属の林がある。コナラ属ばかりでなく松の林からも落ち葉が集められることもある。この辺りではもっとも標高の高い 2300 m にあるタンチェム Tancham 村では、集落から離れた上方 2600 m ほどの標高の斜面にキャベツとジャガイモの二毛作畑が広がっている。1 年目にジャガイモとキャベツの二毛作、2 年目はトウモロコシを栽培する。3 年目にジャガイモとキャベツの二毛作に戻す。これを繰り返している。よく考えられた輪作方法で、ヒツジや牛の糞堆肥と落ち葉が施され、畑の肥沃度が維持されている。ジャガイモは 2 月植え付け、6～7 月収穫、ジャガイモ収穫直後にキャベツの定植が行われ、9～10 月に収穫される。

キャベツは 25 年前から、ジャガイモは 15～16 年前から、栽培していると、キャベツを収穫していた畑の所有者のモンパの男性が教えてくれた。アッサム州のテズプールに出荷するという。これも軍隊が駐屯するようになり、主幹線道路が整備されたことが大きい。今では、村にまで車が入る未舗装の道ができていて、すでに村にはピックアップ型のジープが来ていた。ウンパの重要な商品作物となっている。キャベツの種子袋が落ちていた。日本のそれとかわない装丁で、病気などに強く、生育のよい F1 品種（一代雑種の品種）だった。ただし、ブロッパのつくるチーズやバターとの穀物の物々交換は今でも馬が使われている。

そして、すでに説明したように、ウンパは犁を使って耕す。2 頭の牛が一般的で、犁は木製で大きく、ジャチャが好まれる。体が大きく、力があることと、寿命が牛よりも長いと言われている。

ウンパの村 (Dun) では、村の中には近隣関係つくる地縁小集落をつくっている。父系クラン（氏族）の結束が固く、山や畑は父系クラン、村の共有地、私有地の別があり、父系クランが所有している山（森林）は大面積をしめ、ブロッパたちは、ウンパの山で遊牧をしている。アラとよばれる蒸留酒は物々交換の製品でもあるが、相互扶助の農

作業の現場などでお茶がわりに出されている。ブロッパとの物々交換で得たチーズやバターを使って、茶を飲んだり、おかずの味付け、スープをつくる。15 年ほど前から政府の米の配給制度が普及した。それ以前は、ブロッパ同様、トウモロコシが主食であったが、今では主食はすっかり米食にかわっている。道路ができ、大量の日用品が入るようになって生活がかわってきているのである。

ウンパの生業と農業を特色づけているのは、牧畜とジャガイモの欠如である。ほとんどのウンパの農民は牧畜を行っておらず、ジャガイモは主食ではない。これまで報告されているネパール・ヒマラヤのシェルパ族など農耕民の事例ときわだった違いを見せている（山本・稲村編 2000）。ウンパの中で、牛がそれほど重要な位置をしめていないことは、堆肥にも表れている。すでに述べたように、牛糞堆肥ではなく落ち葉堆肥なのである。牛やヤクなどの糞は燃料として使用されていない。ディランでは、牧畜と農耕は明確な分業として成立し、後述するように、二つの生業は交易のネットワークで強く結ばれている。

3.2 モンパ社会のネットワーク

ディラン郡のブロッパは、主食の穀物や塩、酒などを、伝統的にウンパに頼ってきた。現在でも主流は、チーズ、バターとの物々交換である。チャンダル Chandar の村では、物々交換比率は、バター・チーズ 1 kg と 30 杯のブレ（糌）（約 30 キロ）のトウモロコシ、ヤクの生肉 1 kg は現金売りで 100 ルピー、である（2009 年 12 月 9 日現在、1USD = 43.6 ルピー）。

ブロッパはある特定のウンパの村人と交易関係を結んでいる場合が多い。その関係をナツァン Natsan 関係という。ブロッパにはウンパのナツァンが必要なのである。ナツァンは、ブロッパにチーズやバターの物々交換の便宜を図る。この家と家との関係は世代を超えて維持されることも珍しくなく、親戚や家族同様の関係となる。同様の関係は東ブータンのシャルチョッパとブロッパにも認められた。

ブロッパは利用している山地によりチベット、ブータンとの関係が重要であったが、ウンパはインド独立以前も以降もアルナーチャル・プラデー

シュ州に近いアッサム州内の地方都市との関係が
つよい。東ブータンでの聞き取りでも同様の傾向
がシャルチョッパの人々にも認められた。軍用道
路として舗装された国道がアッサム州のテズプ
ール Tezpur、ボンディラ Bomdila、ディランとつ
ながると、従来、馬に背負わせたりしてキャラバ
ンを組んで歩いていていたディランからまっす
ぐに南下し、アッサム州側にするルートはすたれ、
キャラバンにかわるトラック、ジープによるボン
ディラを経由してテズプールに出るルートが輸送
の大動脈となる。

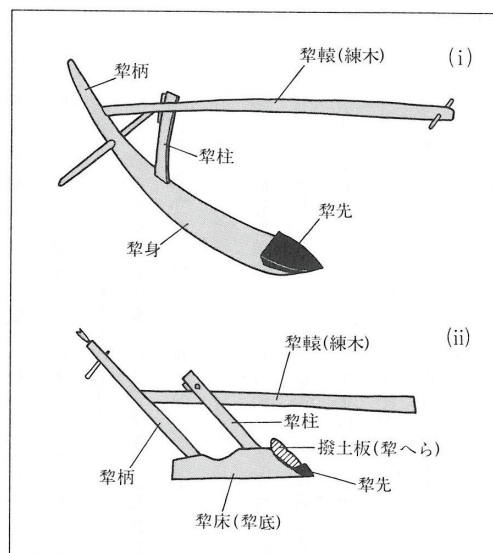
ディランの街からサンティ川沿いに数キロ行
くと、サンティの村に出る。サンティはこの辺り
では有名な水田耕作の村である。長老らに交易の
話を伺うと、アッサム側のウダルグリ Udargri
ではディランから運んできたニンニク、乾燥トウ
ガラシ、サンショ、ウールの毛布を売り、現地通貨
のタカで、新年や祭りのハレの日に食べる米、塩、
服、日用品、金属製の水をためたり運んだりする
壺などを購入して帰ったものだという。今ではす
たれてしまったが、ウダルグリでは、土地の人の
家に何日も泊めてもらうとともに食事などの待遇
を受け、運んできたものをその人を介して売って
いたという。この特別な人もナツァンである。
ナツァンはプロッパとウンパだけの関係ではな
い。ウンパがアッサムの地との交易でもナツァン
がぜひとも必要で、ナツァンとは家族同然の付
き合いをしたものだそうだ。しかし、ディラン
でも多くの店ができ、運送業が発達した今日、従
来のディランのウンパとアッサムのナツァンとの
関係は切れてしまっているようだ。現在の商品作
物は、キャベツやジャガイモである。高原野菜と
いえるだろう。砂利道ではあるが、ジープや小型
トラックが通れるので、村の集約場所まで馬で運
ばれたキャベツやジャガイモは、トラックでテズ
プールやゴーハティなどの都市市場に届けられ
るのである。

一昔前の交易のネットワークは、農業技術をも
伝えていた。長老ケサン ナムジさん（2009年
当時 72 歳）の話によれば、水田はアッサムでの
見よう見まねで 4 世代前くらいにはじまったも
のだという。犁もアッサムから伝えられたという。
この犁については、前章で論じた。サンティの稲
作には、ムリ Muri とよばれる木製の梯子状のま

ぐわが使われているが、これもアッサムから入
ったという。アッサムやベンガルでは竹製で Moi
とよばれている道具である（安藤 2008）。

他に農具で重要な鎌であるが、鍛冶屋はも
ともとチベット人であり、パロン Barong とよ
ばれる大型の鎌はチベット人の鍛冶屋がつくる。
ケサン ナムジさんは、実際、はじめてセンゲ
Senge とよばれる鋸鎌がアッサムから入ったの
を見ているというから、すくなくとも、センゲ
が入ったのは、ケサン ナムジさんの年齢を超
えることはないことになる。鋸鎌は使い捨て
であるという。

ウンパは犁をひかせるのに、牛よりもジャ
チャを好む。すでに述べたようにジャチャは
牡のミタンと牝の牛をかけあわせたもので
あり、体格が大きく、寿命もながくなり、役
牛には最適であると信じられている。ジャチャ
の生産には、ミタンのオスが必要で、ディラ
ンのミタンもしくはジャチャは東隣のミジ
の人たちが飼育しているので、そこから購入
してくる。ウンパは農夫としてアッサムの人
々をやとうこともある。こうしてみると、ウ
ンパの農耕が周辺の民族とのネットワークに
支えられてきたことがよく理解できる（図 5）。



注) (i) 無床犁、(ii) 有床犁

出所) 応地利明 1987 「犁の系譜と稲作」『稲のアジア史 1 アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー—』（渡部忠世ほか 編）小学館：167-212.

図 3 無床犁と有床犁と名称

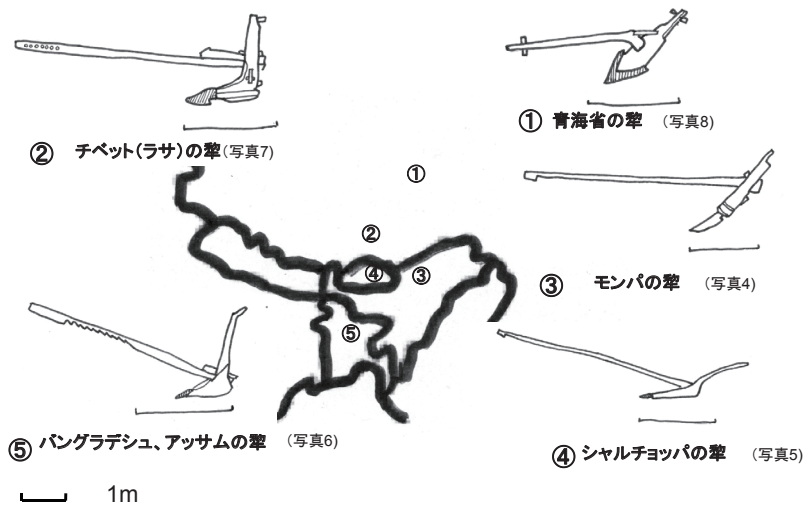


図4 東ヒマラヤとその周辺の犁の分布図

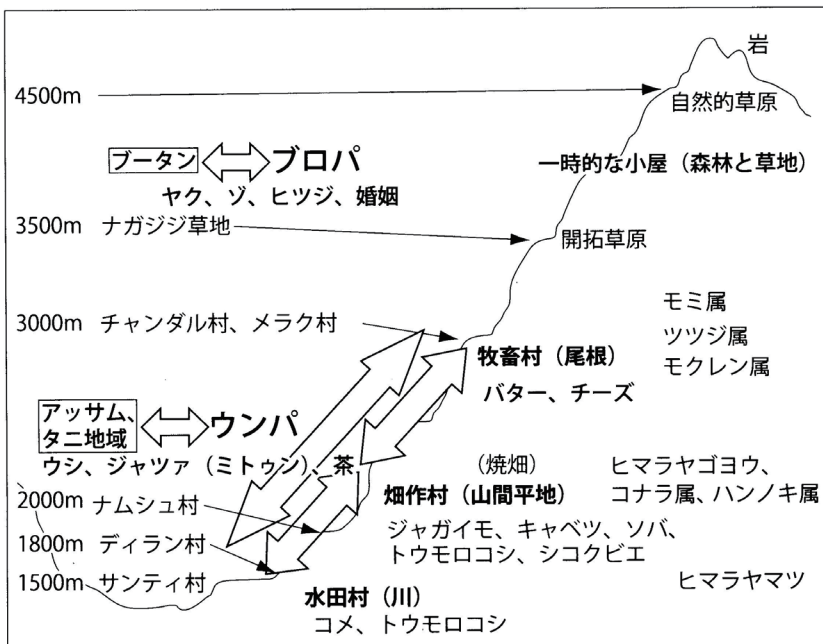


図5 調査地ディランのモンパ・モデル (高地ネットワーク社会)
出所) 文献 (安藤和雄他 2011) の図2より

3.4 モンパ・モデルの文明論的意義

以上から、高地を舞台にして暮らしてきた人々は、地理的にも、日常生活としても、広いネットワークの相互関係の中で生きていることがわかる。これはアジア低地の自給型の農村社会のモデルとは大きく異なっている。これまでの自給型農村社会では、村が一つの世界をつくり、小さい世界での循環であった。しかし、高地で持続的に生きていくには、広い社会、他の村人たちとの積極的な交流を維持し、密教の曼陀羅絵のように世界を包括的に認識する必要がある。なぜチベット仏教が、アジア高地に暮らす人々に受け入れられ、根強い信仰を得ているのかの一つの理由がここにもあるように思える。高地はもともと曼陀羅的な世界なのである。ディランのモンパにおけるネットワークは、ネットワークそのものが互いに相互依存関係をつくり生存を共有しているということである。このモデルは東ブータンでもシャルチョッパとプロッパの間に認めることができた。はたしてグローバリゼーションのネットワークはこうした性格をもちえたものなのだろうか？

4. あとがき—地域の単位性と「文明単位」—

以上から、東ヒマラヤを一つの地域としてくくっていくことがあながち見当違いでないことが理解される。本稿では、まず技術的な問題として、モンパ犁、農耕の技術、冬季森林飼養牧畜に焦点を当て、次に社会の具体的な特徴をしめすためにアルナーチャル・ブラデーシュのモンパ社会の事例をあげた。このようなユニークな農耕・牧畜とネットワークのシステムが生まれ、維持されてきたことに、人が厳しい環境の高所に住むための知恵と工夫のあり方が示されている。

編集委員から本稿に課せられた課題はアルナーチャル研究グループ全体の活動の総括であったが、アイデアを検討するうちに、私が高所プロで掘んだエッセンスをまとめることにした。その理由は、アルナーチャル研究グループは、出発点として地域研究を展開しようという大目的を掲げていたからである。そのためには、研究対象地域の「意味論」が不可欠となる。地域が、ある固有の価値、暮らしや社会の体系を共有する領域であるとすれば、東ヒマラヤが地域として一体的であることを示す何らかの根拠が必要であると思う。

高所プロの活動や議論を通じて私も「高地文明」を考えてきたが、最終的な結論を得ることができなかった。高地文明を語るための研究の蓄積が不足しているからである。私の手に負えることではないが、高地の各地域の「地域としての単位性」が明確化され、「文明単位」としてつながりをもった時、構造的に高地文明という具体的でたしかなものが見われてくると私は考える。そのためにも、私は今後も東ヒマラヤの地域としての単位性と、高地文明をつくる「文明単位」を明らかにしていくことを目的にかかげ、フィールドワークを継続していきたい。本稿が、高地文明論を築きあげる営みに多少なりともお役にたてたとすれば幸いである。

今後、東ヒマラヤ地域論をつめていき、高地文明論の各論編として完成度をあげていきたいと思う。また、高所プロでは医学グループとの共同研究が行われたので、医学的な側面からも東ヒマラヤの特徴を考察していくべきだったと思うが、時間的制約のために、それに触れることが出来なかった。しかし、高所プロジェクトに参加させてもらった一員としてこの点に触れた論考を用意したいと思っている。

本稿は編集者からの依頼原稿として筆者に求められたが、筆者の怠慢のために、雑誌の出版時期の関係で、査読と編集作業に多大な迷惑を掛けてしまった。編集委員各位に陳謝するとともに、丁寧なコメントと本文の修正案を提示された査読者に記して感謝したい。

引用文献

- 安藤和雄 2008 「モンパ族の犁農耕と農具に関する見聞記：2007年9月14-18日インド国アルナーチャルプラデーシュ州 West Kameng, Tawang 県」『ヒマラヤ学誌』第9号、京都大学ヒマラヤ研究会・総合地球環境学研究所「高所プロジェクト」：84-111.
- 安藤和雄・石本恭子・宇佐見晃一・稲村哲也 2011 「東ヒマラヤのあこがれ地、アルナーチャル・ブラデーシュその魅力と現代文明への問いかけ」『生老病死のエコロジー—チベット・ヒマラヤに生きる』（奥宮清人 編）昭和堂：61-89.
- Chand, Raghubir 2004 Brokpa: The Hidden

- Highlanders of Bhutan, Pahar Pothi, 164p.
- Chowdhury, J.N. 1996 (1979) Arunachal Pradesh, Government of Arunachal Pradesh, 279p.
- Dutta, D.K. 1999 The Monpas of Kalaktang: Arunachal Pradesh, Government of Arunachal Pradesh, 95p.
- デュビュイ, ジャック 1995 (1976) 『ヒマラヤ』 (文庫クセジュ 597) 白水社, 150.
- 稲村哲也、タシ・ドルジ、川本芳・2012 「ブータン極東部高地メラックにおける牧畜の変化とその歴史的社会的背景」 ヒマラヤ学誌 13: 283-301
- Kennedy, R.S. 1914 Ethological Report on the Akas, khoas and Mijis and Monbas of ワワン, Shillong (Chowdhury 1996 から引用)
- Sharma, Rakesh 1988 (1960) The Sherdukpens, Government of Arunachal Pradesh, 101p.
- Mills, J.P. 1946 A brief note on agriculture on the Driang Dzong area. Man in India: a quarterly anthropological journal/ Surajit Chandra Sinha. 26(1): 8-11.
- 山本紀夫・稲村哲也 (編) 2000 『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界—』 八坂書房

Summary

Characteristics of Eastern Himalaya as a High Altitude Civilization from a Viewpoint of Agricultural Systems

Kazuo Ando

Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan

Eastern Himalaya is the geographic area of Brahmaputra River System, where the mountains exist along the belt from west to east between Mt. Kanchenjunga and Mt. Hkakaborazi in Sikkim, Bhutan, Arunachal Pradesh and Myanmar. This essay discusses the characteristics of Eastern Himalaya by the following points such as Shifting cultivation, Wet rice cultivation of humid monsoon Agriculture, Monpa plough and Winter pasturing in forest. The society of Monpa is reported as a case of concrete field study on Eastern Himalaya societies. It illustrates that Eastern Himalaya having characteristics of a unity as an area can be “a unit of civilization” forming High Altitude Civilization.